

教育コラボレーション演習「附属幼稚園への支援活動」の試行 ～教員の働き方改革を視野に入れて～

0. はじめに

「教育コラボレーション演習」とは、教育協働学科3回生必修科目であり、学生は、学校や公的機関、博物館や資料館、CSR(社会貢献)に取り組む企業やNPO法人において、30時間以上の演習(インターンシップ)を行う。その目標は、「主体的・対話的で深い学びを行い、教育協働人材としての自己のキャリア形成を育成すること」である。

現在、本科目には約80の演習受入先があるが、次年度より、新たに「本学附属幼稚園」が加わり、教員の「業務補助」に加えて、「遠足等でのサポートや企画」を学生自身が提案することを試みる。その趣旨は、教員の「働き方改革」を遠くの目標としつつ、まずは、今現在、現場(園)の先生方が必要としている業務補助を、学生がスムーズに行なえる仕組みを構築し、学生の若く新鮮な視点で現場を捉えてもらい、ゆっくりとでも学校(園)現場をよりよい場所に変えていこう。そのために大学が何をすることができるのかを一緒に考えてもらいたい、というものである。

それに先立ち、今年度終盤から次年度初頭にかけて、計17名の学生と共に試行を行う(一部は既に開始している)。本ポスターでは、その内容をご紹介します。

1. 事前の学生への趣旨説明

本試行には、教育協働学科理数情報専攻数理情報コース3回生12名と初等教育教員養成課程幼児教育専攻の戸田有一教授、そのゼミ生の皆さん5名が協力してくれることとなったが、特に数理情報コースについては、教育協働学科の様々な専攻・コースの中でも、低年齢の子どもとの接点が少ないと思われた。そのため、事前に趣旨説明を丹念に行った。その意図は、以下のようなものである。

本試行(または支援活動)は、決して、学生に細々とした業務だけを依頼するものではなく、「働き方改革」はどの進路に進む学生にとっても、数年後には自分事になっていること。実際に社会に出るからでは、「1ミリでも外注・削減できる業務はないか」を考える時間がない中で多様な業務を進めていかなければならない可能性が高いこと。今の学生である間に、それらをイメージしながら学校(園)現場を見学し、若者同士で意見交換することは、必ず将来生きてくること等である。

そして、見学に先立ち、着眼点の例や、後述の遠足でのサポート例をいくつか提示しておいた。

2. 園への見学(令和5年2月に実施)

上述のように、特に数理情報コースでは、教育協働学科の様々な専攻・コースの中でも、低年齢の子どもとの接点が少ないと思われたため、まずは園児や園の様子を知ってもらい、「どのような点であれば、我々が先生方の負担を減らしたり、子ども達へのサポートをすることができるか」を考えてもらうために、附属幼稚園への見学を実施した(2月17日と27日)。その際、幼児教育専攻の皆さんは、園での実習を既に終えられた皆さんだったので、実に色々な面でサポートいただいた。

以下では、見学を終えての数理情報コースの学生の声をご紹介します。どの学生も真摯に本試行に協力する姿勢を示してくれ、現場の負担軽減を自分事として捉え考えてくれたことが読み取れる。これにより、次年度の本格実施においても、様々な専攻・コースの学生に向けても、丹念な趣旨説明を行えば、前向きに本活動に参加してもらえる可能性が十分あることが窺えた。

3. 学生の声

学生Aの感想

普段幼稚園児と接する機会がなかったため、実際の園の様子を見学させていただき、想像以上に先生方はお忙しいのだと感じました。広く全体を見ようと思っておりましたが、目の前の子どもたちに気を取られてそれどころではなく、思い思いに遊ぶ子どもたち一人一人をくまなく見守るのはどれほど大変なことか実感しました。見守る目を増やすという点では、学生がサポートに入ることで先生方の負担を減らせる部分もあるのではないかと思います。

学生Bの感想

先生方は、子供たちと遊びながらも、あらゆる方面に目を配らせて、問題が起きたらすぐさま駆けつけられていました。また、子供たちは予期せぬ行動をするということに直面しかなり驚きました。園児たちの予期せぬ行動と先生方の視野の広さを天秤にかけても、1人で対処するには到底厳しいということを実感し、協働的な対処が必要だと痛感しました。これらが実現すれば、先生方の負担の軽減に繋げていくことができるのではないかと考えました。

学生Cの感想

今回私たちは二時間だけの見学だったので、走り回ったり、全力で遊んだりできましたが、毎日、一日中となると大変だなと感じました。思いっきり体を動かしたい園児の遊び相手として、見守り役として体力のある私たちが少しでもお役に立てればと思いました。また、話が聞こえていない園児や、遠くに行ってしまう話を聞いていない園児など、先生方が分かっているても手が届きにくい部分のサポートが出来ればと思いました。

学生Dの感想

子どもたちのパワフルな体力に驚きました。こればかりは体力のある若い男性の先生がいた方が子どもたちの相手をする特に運動面では、私たちのような学生でも負担を減らす手伝いができることを知れました。

学生Eの感想

今回のように幼稚園に行くと子どもたちと遊ぶのは初めてだったので接し方に戸惑うこともありましたが、先生方は周りを見てきめ細やかな対応をされているのがとても印象的でした。遠足や実習の際に何かお役に立てることがないか、しっかり考えてみようと思います。

学生Fの感想

普段は幼稚園児だけで遊んでいるのが気になった。もし一緒に混ぜて遊びに付き合っていたとしたら、とてもじゃないが1日は持たないと感じた。生徒に対しての先生の数をいかに増やせられるかが鍵になると感じた。

4. 園児らの大学訪問時のサポート (令和5年6月を予定)

附属幼稚園では、毎年6月頃に本学への遠足が行われ、本試行ではここでのサポートを予定している。教育協働学科の学生にとっては、教育実習や教員採用試験の時期でもあるが、当日の見守り役と事前準備を分担する等、学生に過度の負担とならないよう気を付けながら試行を行う。また、幼児教育専攻の学生の中には、既に本遠足でのサポートを経験した学生もいるので、様々な面でご協力いただく。

5. 今後に向けて

次年度10月には、現1回生への「教育コラボレーション演習」のガイダンスが始まり、本活動も本格稼働する。本試行を活かして、様々な専攻・コースにお声掛けし、子ども向けのコンテンツを既にお持ちの授業等があれば、その周辺の学生に告知をさせていただく等していきたいと思っている。